

Interview 村山浩

伝統の中の新鮮、削ぎ落とされた音列 パリで活躍するピアニストが国内デビュー

ベーシストの安カ川大樹が代表を務めるレーベル“ダイキムジカ”から第2弾アルバム「バラッド・オブ・リリックス」がリリースされる。日本からフランスへ渡って活躍するピアニスト、村山浩をフューチャーした上質なピアノトリオ作品に仕上がった。パリに在住する村山に電話インタビュー。今回のアルバムについて話を聞いた。

取材：長門竜也



『バラッド・オブ・リリックス』村山浩トリオ
ダイキムジカ DMCD-02

収録曲 バラッド・オブ・リリックス ビ・バップ
カム・レイン・オア・カム・シャイン カミング・フロム・セーヌ
フリーメイソン ザ・ルック・オブ・ラヴ マイ・ファニー・
ヴァレンタイン ザ・ディープ・ヴァレー ニュー・チェンジ
アップ
パーソネル 村山浩(p),安カ川大樹(b),フィリップ・ソアラ(ds)

プロフィール 村山浩(p)

1970年、東京都出身。1995年、“横浜ジャズ・ブルムナード・コンペティション”において、最優秀賞を受賞。2005年まで東京～横浜のライブハウスを中心として活躍し、その後パリへ移住。現在はヨーロッパ各地で演奏活動を行なっている。

フランスへ渡られたのは4年前ですね。

村山：2005年の夏です。日本のジャズは素晴らしいです！僕は日本のジャズに育てられました。ただ、国籍の違う者が出会える場所へ行き、文化的刺激を受けたかった。言葉がなくとも一瞬にコミュニケーションできる音楽をやっているのですから。あと、日本がアメリカ的価値観の影響を多大に受けていると感じていましたから、そこから抜け出したかった。パリには伝統と新しいものが共存しています。世界中の人がいて価値観も多様です。そこで自分自身をみつけよう。実際パリ生活は東京とはまったく違います。

そんなパリで、初めてのアルバム制作に臨まれました。どういったきっかけでしょうか？

村山：安カ川さんの渡仏に合わせ、フィリップ・ソアラ(ds)と録音をしたかったです。二人は面識なく、初共演でした。しかし僕にはうまくいく確信がありましたし、あとはCDを聴いていただければ、彼らのポテンシャルはわかっていただけだと思います。

アルバム作りで意識されたことは？

村山：時間的制限があるなかでできることを考えました。オリジナル曲とスタンダード曲のバランスは大切でした。伝統を表現するうえで、自分の個性を感じていただける内容をめざしました。

プレイに関しては、中音域をちゃんと出しリズムに適度な圧力をかけてスウィングさせ、又楽器をうたわせたかった。

ライナーに、アラン・ジャン・マリー(p)さんが寄稿されていますね。

村山：日本ではあまり知られていませんが、欧州に来るジャズ・ジャイアンツは一度は彼と共演するという名手です。カリブ出身で、僕のフェイヴァリットピアニストです。人間としても尊敬しています。彼との

出会いは、僕に‘ジャズとは何か’を常に意識させます。今回の録音も、彼の音楽の影響を強く受けています。

そのアランさんがあなたをビル・エヴァンスのようだと書かれていますね。村山：それは、一曲めに関してです。カミング・フロム・ザ・セーヌという曲もややエバンス的手法といえるでしょう。その他にもたくさんのピアニストから影響を受けています。16歳の時、キース・ジャレットの‘スタンダーズ’に衝撃を受けて以来、セロニアス・モンク、バド・パウエル、ソニー・クラーク、トミー・フラナガン、ポール・ブレイ・あらゆるピアニストの影響を受けています。僕にもトラディショナルなものが根底にあり、そういうものが概念を形成しています。そしてジャズと感じさせる音楽であるかどうか、これはいつも自分に問かける言葉です。

メンバーのことも、聞かせてください。

村山：本当に素晴らしい人たちです。安カ川さんとは15年来のつきあいで、演奏家としても人間的にも尊敬しています。咀嚼しながら演奏していると思えないほど、出音が速い。世界レベルだと思います。フィリップは、今ぼくの音楽、楽曲を完璧に把握してくれているドラマーです。膨大な経験と、たしかな技術、センス、すべてを持っています。そして、二人に共通するのは、プレイがとても大人だということです。

このメンバーでの日本公演は？

村山：12月に日本でのCD発売記念ライブを調整中です。11月には安カ川さんがパリに来られるので、何か所かで演奏するつもりです。先日、ポルトガルのラジオが、この作品でひとつ番組を作りたいとコンタクトをとってくれました。ほかにそのようなアクセスがあります。僕の作った曲を気に入って聴いてくれる人が世界中にいるのだから、嬉しいですね。